

史遊会通信

No.224 号
平成 25 年
10 月 13 日

事務局
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

九月講演要旨

出雲国造家の実像

村上邦治

一 神代からの家系

『日本書紀』の「国譲り神話」に登場する「天日隅宮」(『古事記』では「天御舍」と呼ばれる)出雲大社(明治五年杵築大社を改称)の祭祀を、創建以来現代まで奉仕続けてきた出雲国造家は、天照大神の第二御子天穗日命を祖先として、皇室に次ぎ連続と続く家系とされている。

(一) 古代出雲王朝説

この説は、「天孫降臨」に至る、最大の山場となる大国主命の「国譲り神話」に、何らかの歴史上の背景や、痕跡を見出そうとするもので、出雲に古代王朝が存在しており、その中心が、出雲大

社とするものである。

一九八四年、荒神谷遺跡で、これまで全国で発掘された総本数以上の、三五八本の銅剣が発見された。九六年には、四カしか離れていない加茂岩倉遺跡で、一か所では最多の三九個の銅鐔が発掘されてからは、古代王朝説を掲げる書籍が、多く出版されている。

さらに、当地では、特異な形状の墳丘墓として、六〇年代から発掘され、現在百体弱見つかった四隅突出型墳丘墓の存在がある。分布状況は、古代出雲国を中心に、山陰から北陸地方に広がっている。

例会のお知らせ

◎ 10月例会

日時 平成25年10月23日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 漆原直子氏

テーマ 飲酒の歴史と飲酒の今日の問題

自由執筆者 鍋屋次郎・中山喬央・

太田精一の諸氏 締切10月末日

◎ 11月例会

日時 平成25年11月27日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

討論会 海舟と諭吉(別記参照)

司会 平山善之

自由執筆 「今年感動した三冊の本」

全員(友の会員も含む)

字数 20字75行を目安に

締切 11月30日

二〇〇〇年に、出雲大社本殿の巨大心柱が発掘され、本居宣長の『玉勝間』に紹介された「金輪造営差図」の信ぴょう性が証明された。この発見により、現在の高さ八丈（二四^尺）が、「中古では一六丈、上古では三二丈（九八^尺）」との言い伝えを甦らせ、「天日隅宮」を類推させるものとして、注目された。

近年、これら新発見が相次ぎ、古代王朝説を勇気づけてきた。しかし、荒神谷、賀茂岩倉両遺跡の大量青銅器類は、いずれも弥生中期のものである。四隅突出型墳丘墓の製作年代は、弥生末期とされ、いずれもヤマト王権成立以前のものである。発掘された大社本殿巨大心柱は、年輪法などで、宝治二年（一二四八）の造営時のものとされており、現在と同じ八丈の高さの造営時のものである。「天日隅宮」を連想させる出雲大社高層説の最古の文献は、神仏習合期の中宮寺であった、鰐淵寺の「杵築大社旧記御遷宮次第」に「景行天皇の御時三二丈、その後一六丈になり、次に八丈になり、今は四丈五尺也」とするものである。

現在、一六丈（四八^尺）の神殿造営技法の伝承や、それらに関する造営図は残っていない。大社が、高層建築であった証拠はない。

しかも、奈良、平安両朝期、大社の神階は、同国熊野大社の、一段下の位に止まっていることを

考慮すると、高層神殿が、過って存在したとの説は、採用され難い。

当地の弥生末期から古墳時代に至る遺跡で、大型のものは、見当たらない。最大でも、山代二子塚の百^尺弱である。また出土した副葬品は貧弱なものであり、王朝を窺わせるものは出ていない。

（二） 出雲国造出雲氏の発祥地

出雲氏に関する文献資料は、『出雲国風土記』『延喜式』の「神賀詞奏上」など、多く存在している。

出雲氏は、現在松江市に編入された出雲国意宇郡の豪族であった。これは『風土記』の編纂者の一人として記載されており、また「神賀詞」奏上の中にも、熊野大神を最高位にあげ、熊野大社の祭祀を第一としていたことから明白である。杵築大神（大国主命）は「天造らしし大神」と称えられるが、それでもなお、熊野大神に次ぐ地位に止まっている。

中央朝廷においては、『記紀』の普及に伴い、出雲大社の神階を、徐々に昇階させていくのだが、十世紀頃までは、出雲大社の重要性は、近年ほどは、認識されていなかったのである。

出雲国造出雲氏は『三代実録』によると、八世紀の終わりに、国造職と郡司職の兼任を禁止された。都での「神賀詞」奏上儀式が終了した、九世

紀から十世紀にかけて、これまで本拠地であった意宇郡から、出雲大社のある杵築に、移住したのと思われる。出雲国造家の大社祭祀専念は、十世紀以降であり、頭書の言い伝えは、『記紀』編纂後、創作されたものであろう。

出雲大社祭祀専念以降、国造家は、南北朝期、一統から分裂するものの、皇族に似た上官制度により、男系相続を続け、今日に至っている。

明治期には、天皇は「現人神」とされ、出雲国造は「生き神様」と信じられていた。特に地元の中四国地方では、人にして神なりの時代が続いたのである。当時の新聞によると、

「大教正の神拝さるるため、一寸座られる

新薦を群集の者ども打寄つて掴み合い」

「大教正の入られし風呂の湯は、銘々徳利に入れて一滴も残さぬほどなり」、

などの逸話が報道されている。

柳田国男の『故郷七十年』には「生き神様のお通りだといので、村民一同よそ行きの衣装を着て道傍に並んだ。その人の着物にふれでもすれば、霊験が伝わってくるかのような敬虔な気になったようであった。」と書き残されており、「生き神様として根強く信じられていたのである。」

二分立の史実

（一） 両家の言い分

現宮司千家尊祐が著した『出雲大社』には

「後村上天皇の興国四年（一三四三）五五代の孝宗が国造になったが、弟の貞孝は、時の出雲での実力者塩谷判官高貞の女が生母なので、その実力を背景に別家し、翌五年、孝宗と貞孝が約定を結び、年中の祭事および所領等を分掌することとなった。これから国造が二流に分かれて、本家が千家を姓とし、分家が北島の姓を用い、子孫がおのおの相継ぎ、今日に至った。」としており、これが千家本家説となっている。千家家では、長男で五四代清孝から、弟で次男孝宗が相続したことを証する、清孝からの譲り状を所有し、本家の証拠としている。

北島家では、父で五三代孝時から三男貞孝が相続したとして、本家を主張するのである。

北島家の保有する父孝時からの譲り状には

「長男清孝は一期限りという条件で五四代を相続させ、五五代は三男貞孝とする」と、明確に記載している。その譲り状には次男孝宗の名は一切記載がない。これには祖母（五二代の妻、塩谷高貞の姉）が裏書をしており、五三代からの譲り状は、完全なものである。

元来、貞孝は、祖父で五二代泰孝の時より、既に、一部財産を三兄弟の中で、ただ一人相続するなど、父である五三代のあとの五四代は、三男貞

孝と目されていたのである。

史実では、北島家が本家と認められるが、分裂後幕末まで、両家による本家争いは激しく続いたのである。

（二） 本家争いの決着

この争いは、明治維新政府の神社制度改革により、終結した。

明治四年、神社はすべて国家管理となり、宮司の世襲は廃止され、政府による任命制となった。出雲大社は、社格筆頭官幣大社に列せられたものの、両家による祭祀は認めなかった。出雲大社宮司は千家家を、北島家は岡山県吉備津神社宮司に任命したのである。北島家は、出雲大社から離れる事を拒否、この任命を辞退して、大社東側にある北島国造館に留まった。しかし、最早大社祭祀には、関われなくなったのである。

千家家を出雲大社宮司に任命したのは、当時の千家尊福という、個人の存在によるものであろう。まだ二十代の若さながら、神道教化を行う最高位の大教正で、しかも、東部管長の伊勢神宮宮司にも、西部管長の要職にあった。

すでに六百年前の史実（北島家本家）より、神道界を代表する千家尊福を、出雲大社から外すことは、到底できないことであった。

尊福は、明治十年頃からの、神道界を二分する

祭神論争の一方の旗手となり、名実共神道界の第一人者となる。

その後、尊福は、別世界ともいうべき政界に転じる。埼玉県知事、静岡県知事、東京府知事を通算一五年務めた。さらに、西園寺内閣の司法大臣に就任するなど、ここでも活躍する。

千家家は、明治以降一貫して出雲大社宮司を続け、また、尊福の栄達があり、もはや北島本家の主張は、小さくなっていった。世間では、出雲大社宮司千家家が本家であることに、疑いを持つ者はいなくなったのである。

三 おわりに

平成二五年は、伊勢神宮の「式年遷宮」があり、出雲大社においても、六〇年に一度の『大遷宮』が挙行された。常日頃、日本人に忘れ欠けている日本神話が、再び、おおきな話題となっている。こうした神話に、話題があつまるのは、何故だろうか。

数々の神話に由来する、出雲大社と出雲国造家の謎は、多く残っている。これからも、少しずつその実像に迫っていききたい。 おわり

参考文献

- 『出雲大社』（千家尊統 学生社）
- 『出雲国造家文書』（村田正志編）
- 『北島国造家沿革要録』（出雲教）

自由執筆

えみしの聖地 三輪山

柴田弘武

敏達十年春閏二月

「蝦夷(えみし)数千が辺境を犯し荒らした。これによりその首領の綾粕(あやかす)を召して詔され、『思うに、お前たち蝦夷らを景行(けいこう)天皇の御代(みよ)に討伐され、殺すべきものは殺し、許せるものは許された。今、自分は前例に従って、首領者である者は殺そうと思う』といわれた。綾粕らは恐れかしく、泊瀬川(はつせがわ)の川中に入り水をすすって、三輪山に向かい誓って、『私も蝦夷は、今から後、子々孫々に至るまで、清く明(あきら)けき心をもって、帝にお仕え致します、もし誓いに背いたなら、天地の諸神と天皇の霊に、私どもの種族は絶滅されるでしょう』といった。

(『日本書紀、宇治谷孟 現代語訳』)

敏達天皇は後の推古天皇を后とし、蘇我馬子・物部守屋をそれぞれ大臣、大連とした天皇である。その十年は西暦五八一年とされるから、これはかなり史実に近いものと考えてよさそうである。しかし「辺境」とはどこかが明確でなくうさんくさい点もある。前例として挙げられている景行天皇の御代の話は、景行紀四十年条のヤマトタケルと五十六年条の御諸別王(みもろわけのみこ)の東夷征討の話である。ヤマトタケルの時は俘虜にした蝦夷を伊勢神宮に献上したとされる。しかし蝦夷たちは昼夜喧しく騒いだので、倭姫命はこれを朝廷に進上する。朝廷は彼らを三輪山(御諸(みもろ)山ともいう)の辺(ほとり)に置いた。しかし更に騒ぐので、畿外の播磨・讃岐・伊予・安芸・阿波五カ国に分置したとあり、御諸別のときは蝦夷の首領のアシフリベ等が降伏したので、「降伏する者を許し、降伏せぬ者は殺した」とある。

しかし景行天皇の実在性は乏しく、これらの話はヤマト王国成立前史の史実を適当に構成し直したものである。ただここに「三輪山」「御諸別」の名が出てくることは興味深い。

ところで敏達紀であるが、蝦夷の辺境の騒乱に対して首領の綾粕が「召された」という表現は、その「辺境」が東国のような遠地ではなかったような印象を与える。しかも綾粕は泊瀬川(奈良県桜井市の三輪山山麓を流れる初瀬川)で斎戒沐浴し、三輪山に向かつて子々孫々の忠誠を誓ったという。なぜ誓いを三輪山にたてたのであろうか。

三輪山の神

いうまでもなく三輪山には大三輪神社(大神神社とも書く)が祭られている。祭神は大国主命(オモノヌシ)、ヤチホコなど多数の異名がある。しかし田中八郎『大和誕生と神々』によれば、本来はミムロ神だったという。であり、ヤマト王権に国譲りをさせられた神であるから、先住民の神であった。先住民とは誰か? それは縄文の血を

ひく人びとであり、彼等はヤマト王権がエミシと呼ぶ人びとであった。

菅原進氏も『アイヌ語地名解(追補遺)』で、三輪山の「ミワ」はアイヌ語の「モ・イワ」小さな・聖山」であり、音韻変化で「ミワ」となったといい、それはエミシの聖山であったと述べている。

大三輪神社には拝殿はあるが本殿はない。本殿に当たるものは三輪山そのものなのである。山頂には磐座(いわくら)と呼ばれる三群の岩石群があるという。すなわち縄文の信仰形態である。この山を神聖なものと観じて共同体の精神的支柱とし、結束を固めていた人たちがこの地のエミシたちであった。それはせいぜい大和国の範囲のことであろう。ということはこの神に誓いをたてた綾粕はこの地の人であった可能性が高いというべきだろう。あえていえば蝦夷数千が騒乱をおこした「辺境」とは案外大和周辺だった可能性があるように思えるのである。

敏達朝には大和王権は列島の大半を支配下に置いていたであろうから、その本拠地の大和で蝦夷が騒乱を起こしたとは書きにくい。そこで書紀はあえて「辺境」と曖昧に書いたのではなからうかと勘ぐりたくなる。

ヤマトのエミシ

大和国の前史は神武天皇の東征に始まることは周知のことである。その神武たちは熊野の山中

を縦断して宇陀にたどり着く。この地の首領は兄(エ)ウカシ・弟(オト)ウカシであった(ウカシの名はアイヌ語の翁を意味するエカシに近い。アイヌ語は縄文語を引き継いでいると考えられる)。兄ウカシは神武に抵抗しようとするが、弟ウカシが神武に内通して殺される。更に神武は吉野に向かう(大友幸男の『日本のアイヌ語地名』によれば、吉野の古音はエシヌで、これもアイヌ語の「イ・アシヌ」獲物・十分ゆたかな」で、母音が二つ重なり、尾のある人や、岩を押し分けて出てくる尾のある人に会う(水銀の採掘工人であろう―松田壽男)。彼等は「吉野の国栖(くず)」の先祖とされる。国栖は「厩」でエミシに対する蔑称である。神武軍は伊奈瑤山(現宇陀市榛原町の伊那佐山か)で苦戦するが、その「イナサ」もアイヌ語の「イナウ・サン」幣の・壇」で原住民が祭壇を置く山であったのだろう(大友幸男・前掲)。その間にも八十梟師(やそたける)を討ち、更に忍坂邑(おしきかむら)では来目部(くめべ)が敵を全滅させた。その時来目部が歌った歌が、

愛瀾詩(えみし)を 一人(ひだり)百(もも)な人
(ひと) 人は云(へども) 抵抗(たむかひ)もせず
(エミシ)を、一人で百人に当たる強い兵だと、人はいうけれど、抵抗もせず負けてしまった。)である。

ここでは「エミシ」が「愛瀾詩」と美しい字で書かれている。ということは土着の人びとは自分たちを「エミシ」と誇りを持って自称していたのである。ウカシの語源については様々な説があるが、私は大友幸男のアイヌ語の「イミ・チユ」に由来し、その意味は「美衣の・吾」||「美衣の人」だという説(『江釣子古墳群の謎』菅原進の『アイヌ語地名解』も同じ)にもっともひかれる。「エミシ」を「蝦夷」と漢字表記するのは景行紀以後である。言うまでもなく原住民を蔑視した上での宛て字である(エミシは別にカイとも自称していたと思われる)。

ともあれ神武東征の頃(四世紀初めか?)は、列島の先住民は「エミシ」と自称(他称か?)していたのである。彼等はその後列島で一部は倭人と同化し、一部は同化を拒んで北方へと移動していったのであろう。しかし奈良・平安時代に至っても吉野国栖は節会(ふしあひ)のたぎりに都に贄(にえ)を上納していることからわかるように、彼等の一部はずっと現地で先祖以来の生活を続けていたのである。

敏達朝には大和の国中(くんなか)は弥生時代以来の水田耕作地域となっていたが、なお宇陀や吉野の山中(さんちゅう)では狩猟・漁労を主とするエミシたちがいた。彼等は水銀採取とその交易を通してヤマトの和人たちと共存していたのである(田中八郎『大和誕生と水銀』。その中で彼等

は依然として三輪山の信仰を持って結束していた。おそらくヤマト王権はそれを心良しとはしていなかったであろう。だが崇神朝では大三輪神の祟りで国中の半数が疫病で死んだり、流浪したりしたので結局大三輪神の子孫である大田田根子をして、この神を祭らしめざるを得なかった。また叔母のヤマトトトビモモソ姫を大三輪神の妻としたが、彼女はこの神の怒りを買って、結局箸で自分のホトを突いて死なねばならなかった。また雄略天皇はその神の顔を見たいと言ったが、実際に現れると自ら顔を隠して殿中に隠れざるをえなかった。

これらの話から大三輪神の神威に対してヤマト王権はついに対抗できなかったことがわかる。だから王権はヤマトの国中(くんなか)の民衆からこの神を遠ざけるため、あの神は実は蛇だと言ったり、雷だと言ったりその神威を貶めようとしたのである。

敏達朝にエミシの反乱が起きたのも、そのようなヤマト王権の嫌がらせに対する反抗だったのではなからうか。これは結局エミシの敗北になるわけだが、この時点でもエミシの首領が将来にわたって叛意のないことを誓わされるのは彼等の神である大三輪神であったのである。

大三輪神(オオクニヌシ神)に対する信仰は今もなお日本人の中に根付いていることに注目したい。

自由執筆

余命

瀧澤 中

父は癌の手術をしてちょうど一年目の今年初め、他界した。一年間、一度も好転することなく、癌細胞がじわりじわりと身体を蝕んでいく様子に、ふだんは無神経な私も少々参った。

余命宣告は、昨年の秋だった。

父母は外して私と家内が医師から話を聞き、そして父に伝えるかどうか判断することにした。

「早ければ三カ月、半年はもたない」

私と家内は父にそれを伝えるべく、話を切り出した。父の反応は、

「余命は知りたくない」

だった。

少しでも延命できるよう、絶望的な状況の中で抗がん剤投与を行い、父は副作用によく耐えた（この段階での抗がん剤使用は今でも疑問だが、本稿の主題ではないので省く）。遺品を整理した時、常用の手帳には、「死にたくない」と、この時期に書いていた。

自宅に戻ってからは、家内と私が交代で父の部屋に泊りこみ、緊急時に備えた。

要は、生涯の中で最も父という時間が多かったわけだが、この間、父には「死に支度」をした様子がまったくなく、遺訓めいたことも言わず、ただただ、病氣と戦っていた印象が強い。

すでに現役を引退していたし、息子も自分の後を継がず畑違いの世界で生きていたから、仕事人間・会社一筋の父としては、何も言うことは無かったのかもしれない。

必要があつて黒田如水のことを調べているが、如水は病床で自分の死の日時を予見し、遺訓めいた話をして、さらに臨終の際には、和歌を詠じながら果てたという。

臨終の際の和歌はともかく、予見はまんざら嘘でもあるまい。日時までは無理でも、ボチボチかな、と感じるのだと、聞いたことがある。

父は死までの約二週間、ホスピスに入った。肺が完全にやられていたので、水もうまく吞めず、辛さから私の腕をつかんで、「おい、殺せ。いいから殺せ」と言った言葉が忘れられない。おそらくこの時、父は初めて死を自覚したのではないか。父らしい言い方で、私にそれを伝えたのだと、今はそう思うことにしている（「殺せ」と言われた方はショックだが…）。

医師から余命宣告されたことは知りながら、いつまで、ということには聞かなかった父の姿に、最

初ひっかかるものがあつた。黒田如水とは言わないうが、せめて普段の父らしく厳然とあつてほしいと思つたが、しかし、それは死を目前にしたことのない私の、浅はかな願望でしかなかった。

大野伴睦は昭和三十九年三月に脳溢血で倒れて入院し、五月末に病院で亡くなった。見舞いに訪れた読売新聞の渡邊恒雄が、様子を語っている。「虎のような顔をした大野伴睦が、猫のように『ヒィーッ』とひたすら泣くんだ。びっくりしたよ」

次期自民党総裁に、三選目の池田勇人か、佐藤栄作を推すか、大野派の中で激論が交わされていたその最中のことだそうである。

あの、生涯三度も監獄に行き、戦前は大政翼賛会に歯向かつて落選し、戦後は自由・民主の保守合同をやつてのけ、田中角栄や大平正芳を「小僧どもは出て行けッ」と総理大臣室から追い出した男が、自民党総裁選の真っ最中にも関わらず、死を目前にして、泣きじゃくつた。

死を恐れることは、怯懦ではない。最も人間らしい感情の発露だと、今はそう思える。

自由執筆

愛国テロを賛美する国

新井 宏

韓国にいた頃は、いつもズボンの左ポケットが、分厚い財布で膨らんでいた。最高額の紙幣が八百円程度の一万ウォン札しか無かったからである。だから数万円分を持ち歩くと、実に豊かな気分であった。

それにしても、不便なことこの上ない。そのため、一般では小切手とか商品券で代用する便法もとられていたが、どうしても偽造や信用問題がつきまとう。だから当然、高額紙幣の発行やデノミがしばしば話題になっていた。

しかし、インフレ圧力になるとか、通貨の国外持出しが規制し難いとか、賄賂金の運搬が簡単になり汚職が増えるとか、韓国らしい理由で、なかなか進まなかった。試みに計算してみると、五億円ほどの一万ウォン紙幣の重さは一トン近くにあり、トラックで運んだというのもあながち誇張ではない。

しかし、高額紙幣がないのは後進国の特徴である。

先進国の場合、シンガポールの一万ドル札六十

万円)やスイスの千フラン(十万円)、EUの五百ユーロ札(七万円)を別格とすれば、スウェーデン、デンマーク、ノルウェイの千クローネ(一万七千円前後)、ロシアの五千ルーブル(一万五千円)、米国、カナダ、豪州、ニュージーランド等の百ドル札(一万円)、日本の一万円札、英国の五十ポンド(八千円)など、概して一万円程度である。

それに対して、中後進国の場合、インド、タイ、ベトナム、マレーシア、フィリピン、南ア、エジプト、イラン、イラク、アルゼンチンなどが約二千元、中国、インドネシア、パキスタンが約千円である。

誇り高き韓国としては、高額紙幣がなく「後進国のイメージ」で見られることには我慢できない。そのため、二〇〇七年になってやっと、十万ウォン札と五万ウォン札を二年後に発行すると決定した。十万ウォン札ならば一円で、先進国入りできる。

さて、その後の進展であるが、五万ウォン札の方は、予定通り儒学者栗谷李珥の母で詩人・画家として有名な申師任堂の肖像を用いて二〇〇九年に発行された。ちなみに息子の李珥の方は、もう四十年間も五万ウォン札の表を飾っているが、母上の方はその百倍の価値である。母と子の絆が

異常に強い韓国であるから、なるほどとも思う。一方、十万ウォン札の方は、肖像に予定していた独立運動家の金九が、最高額面の紙幣にふさわしくないと保守系から激しく反対され、結局取りやめになってしまった。

そもそも、金九の肖像を最高額紙幣に用いようとしたのは、盧武鉉大統領である。金九が、米国を背景に李承晩が進めた南朝鮮の単独選挙に反対し、南北統一政府を主張していたことを盧武鉉は高く評価していたからである。事実、もし金九らの主張が容れられていたなら、朝鮮半島における米国の影響は著しく削がれ、おそらく朝鮮半島には共産圏の統一国家が存在していたであろう。しかし、米国と強烈な反共主義者の李承晩がそれを認めるはずはなかった。結局、金九は政権を手にした李承晩によって暗殺されてしまう。

実は、金九のことを初めて知ったのは、韓国の郊外をやたら歩き回っていた頃である。道端にみすばらしい金九の碑が訳ありげに立っていた。読んでみると、著名な独立運動家で、中国に亡命政権を作り抗日活動を指導した人物らしい。

更に調べて見ると、第二次世界大戦の終結時に、思想犯、政治犯が釈放され、百にも達する政党が次々と現われるなかで、米国帰りの李承晩と中国

帰りの金九が統合して大韓独立促成国民会を結成、李承晩総裁のもとで副総裁に就いている。それにしても日本ではあまり知られている人物には思えなかった。

しかし南北統一を国民世論とする韓国では、右派からも左派からもかなり人気があったらしい。さもなければ、いくら盧武鉉が推したからと言って、最高額紙幣の表を飾る案が生まれるわけがない。当然、高潔な人物であったのだろうと思う。

ところが、これがどうも生来のテロリストとレッテルを貼りたくなるような人物なのである。

まずは、終戦の年の十二月、中国から帰国早々に、韓民党の党首・宋鎮禹暗殺の容疑で米軍に召喚されている。しかもその二年後にも同じ韓民党の党首・張徳秀を暗殺した疑いで召喚されている。いずれも確証が挙がったわけではないが疑われるのには背景があった。

実は、一九三二年(昭和七年)の李奉昌による昭和天皇暗殺を狙った桜田門事件も、同じ年の尹奉吉による上海天長節爆弾事件(白川義則陸軍大將が死亡、後に日米開戦回避に努めた駐米大使野村吉三郎海軍中將が右目失明、終戦時に降伏文書に調印した重光葵公使が右脚を失った事件)も金九の指示によるものであった。

更に遡れば、一九二一年(大正十年)にはソ連の政治資金が臨時政府に上納されていないという理由で、韓国人の共産主義者たちの暗殺を指示しているし、その翌年には刺客を放ち韓国の共産主義者金立を上海で殺害している。

しかしながら、ここまでは政治的な独立運動の一環と見なせないこともない。ところが、更に遡ると一八九六年(明治二十九年)には、ささいなことから憤慨し、閔妃殺害への報復と称して日本人商人の土田讓亮を殺害している。金九はこれを愛国的な行為に装うため、土田讓亮を陸軍中尉としているが、それが虚偽の主張であったことは韓国でも明らかにされている。それにもかかわらず、韓国ではこの事件をいまでも「鵝河浦義拳」などと持て囃している。

その金九は、因果はめぐるのであろうか、李承晩の指示で陸軍砲兵少尉の安斗熙により暗殺されてしまう。金九が今でも右派、左派を問わず人気があるのは、独立後間もなく暗殺されてしまったことも関係しているであろう。

二〇〇二年にはソウルに「祖国と民族を愛し、それらを守るために一生をかけて闘った民族運動家」として、彼の号「白凡」を冠した「白凡記念館」という大きな歴史博物館が建設されている。

以上のことから判るように、金九は今の基準から言えば間違いなくテロリストであった。だから、韓国が金九の十万ウォン札の発行を中止したのは本当に良かったと思っている。さもなければ、世界中から「韓国は政府もテロリスト崇拜する国」と嘲笑を受けるところであった。

ところが、ここに来て、朴槿恵大統領が中国を訪問し、習近平主席に、伊藤博文の暗殺者である安重根の銅像を犯行の地ハルビンに建てる許可を求める事件が起きた。中国側も驚いたことであろう。事前の外交交渉になかった件をいきなり首脳会談に持ち出すことも非常識であるが、テロリストの銅像を外国に建てようという国際感覚の欠如にも苦慮したであろう。

いまや、「テロとの戦争」は国際政治の最重要課題である。米国もロシアもイスラム圏も、更に中国も、民族的、宗教的、地域的な独立運動を掲げる「愛国テロリスト」との戦いに悩まされ続けている。その中で、チベットやウイグルの少数民族独立問題を抱える中国が安重根の銅像建設を許すはずがない。その国際感覚の欠如が、韓国の歴史認識の欠如を如実に示しているのである。

世界各国の首脳に会っては、「独島や慰安婦問題」を言いつけてまわる盧武鉉や朴槿恵に、聞い

ているふりをしながら、辟易している首脳達の姿が目に見え。

つい最近も、折から訪韓中の米国ヘーゲル国防長官を朴権恵大統領が「接見」し、「歴史・領土問題にしばしば退行的な発言をする日本の指導部のせいで信頼関係が形成できない」と言いつけた。「接見」とは格下に対して用いる用語で、その相手に向って「言いつける」とは何事か。第一、「先生に言いつける」ことなど恥ずかしく女々しいことだと気付かぬのであろうか。もつとも朴権恵は女性であるが。

それにしても、韓国は未だ最高額の紙幣が五万ウォン(四千円)で、ブラジルの百レアル(四千円)並みであり、台湾の二千圓(七千円)、メキシコの千ペソ(七千円)には遠く及ばない。不本意なのではなからうか。

もし今度、十万ウォン札発行の機会が来たならば、テロリストの金九などでなく、「韓民族独立の父」安昌浩をぜひ採用すべきであろう。

安昌浩は、他の独立運動家らと異なり、テロによる武力行使等には一貫して反対し続け、「ウエノム(日本野郎)」という言葉を使わず、打倒の対象の相手にも敬意をもって「日本人」という言葉を用いていた。

彼の思想は「朝鮮人自身が近代国家としての力を養った上で、民族の実力を以って日本からの独立を勝ち取るべき」という点にあり、そのため日韓両国の歴史学者の評価は極めて高い。

自由執筆

丹後国一宮元伊勢籠神社

—— 神社名の謎 ——

諸橋 奏

籠神社は京都府宮津市大垣。日本海側の若狭湾西南部奥に天橋立を控えて座している。戦前の神社数は大神宮から鎮守の社まで日本全国一十二社を数えた。現在の神社本庁傘下は約七万九千社という。

その中で社の呼称最多なのが籠神社。「籠(この)大神御由緒」に記された社名を列記すると「丹後一宮元伊勢籠(この)神社―日本三景天橋立―」をはじめとして―お伊勢さまのふるさと―元伊勢籠神社。本宮籠神社「別称」籠宮大社・元伊勢大神宮・伊勢根本丹後一宮・一宮大神宮。奥宮真名井神社「別称」豊受大神宮・比沼真名井・外宮本宮・元伊勢大元宮。更にヨサの宮(吉佐宮)、山

陰道一之大社、元伊勢、籠宮、元伊勢の社、丹後国一之宮、籠名神社(このみょうじんじや)、元伊勢宮、元伊勢丹後国吉佐宮がある。

この他にも、こもり神社、内宮元宮、籠宮大明神、籠宮大権現、丹後国総社、匏宮(よさのみや)、与佐宮、与謝宮、伊勢の外宮元宮の呼称がある。当社が古代からいかに変遷する歴史の荒波を乗り切つて来たかを窺い知る証左であろう。

その社歴を神社名から探ると、まず「丹後国」往古、丹後(たにはのみちのしり)は丹波の一部であった。「丹波―タンバ」は「タニハ―田庭」の転で、水稲の渡来(弥生時代のはじまり)を偲ばせる言葉である。大陸に日本海という内海で繋がる山陰地方は地政学的に伝来の大陸文化を吸収し、稲作による農耕社会の発展と^①益による連携力で、古代日本の最強勢力になっていった。一方、四世紀前半までに政治・軍事力をもった大和朝廷は丹波を取り込もうと手段をつくした。伝承によれば武力では崇神天皇の時に四道將軍(丹波道主命)の派遣、次いで懐柔策として開化天皇や垂仁天皇の妃は丹波の国からとの婚姻政策、更には「神頼み」と丹波の五穀農耕の祖神である豊受大神を天皇家祭神天照大神の相手神として雄略天皇の二二年(四七八)伊勢に移し外宮とした。それでもなお

不安が残るとして元明天皇の和銅六年(七一三)大丹波国から五郡を分けて丹後国をつくらせ、強大国を二分し、漸く弱体化の目的を果した。

「一宮は旧丹波国を二分、丹後国が出来たことから、後世各々の国に一宮が出来た。丹波国一宮出雲大神宮(亀岡市千歳町無番地)と丹後国一宮籠神社である。序でながら出雲大神宮は和銅年中(七〇八〜七一四年)出雲国杵築(出雲大社)に大国主を遷したので俗称「元出雲」と言われている。

「一宮」とは「各国の由緒があり、信仰の篤いその国第一の神社」のことで、日本全国六七ヶ国、九六社あるといわれる。尚一宮制が何時、何のため、どのように成立したかは不明であるが、初見は康和五年(一一〇三)伯耆国一宮倭文神社の出土品に、である。

「元伊勢」については改めて丹波の地名由来話を記す必要がある。

『丹後国風土記』(残欠)によれば、豊受大神(食物を主宰する神)が伊去奈子嶽(いさなごたけ)現磯砂(いさなご)山に天降り、真名井を掘り、水田を拓き稲作をしたところ、大変立派に稔ったので「あなにえし田庭一タニハ」といったのが丹後に。当地に豊受大神を祀ったのが奥宮・与佐宮である。この丹波の土地神の豊受大神を大和の地に遷す

るため、三輪山麓に祀られていた皇室祖先神の神霊を杖に宿らせ倭姫命が、此地に四年間遷座するなどの末、御饌津神(みけつかみ)として伊勢度会(わたらい)郡の山田原に祭祀し外宮とした。かくして天照大神が主祭神の内宮と併せて神宮が誕生する。籠神社が元伊勢といわれる所以である。

「籠(こもり)神社」の社名は天照・豊受両大神が伊勢に遷した後、天孫彦火明命(ひこほあかりのみこと)を主祭神として「与佐宮」を改めたもので、大化改新(六四五年)後のことという。与佐宮(匏宮よさのみや)の社名の由来は奥宮に偶生育していた天ノヨサヅラ(瓢箪の誉め言葉)に御神水を入れてお供えをしたとの説話によるものという。又籠神社の名称起源については、『御由緒』に御祭神彦火明命が籠船(かごふね・飾り船)に乗って龍宮に行った故事に由来するとあるが、このお伽話は預りおくことと致したい。しからば、「籠(こもり)神社」とは。

参籠(さんろう)「(オ)コモリ」は神社に止宿して祈願することで、「コモル」は精進(心身を浄め行いを慎むこと)の形である。「コモルコト」は「まつりの本体」なのである。勿論祈願は自然(風・雨・旱魃)に弱い稲に対する目に見えないカミの働きへの崇拜であった。

米(コメ)の語源は稲の神のまつりに関係してコムル・コモル(コムから派生の自動詞)の意だという。こもり神社は米の神社。丹後・元伊勢・籠の総てが稲作のことであった。

尚稲作の丹波への伝来は、弥生中期初頭、朝鮮半島南部からの渡来人によって齎されたと推測しているのであるが……。

自由執筆

「ハシからハシ」のはなし

諸橋 奏

物心がついて以来二六時中世話になり、気がかかって「名字」。

日本の名字は約三〇万あり、平安末期・一二世紀末頃、武士が領地名を名乗ったのに起源があると言い、多くが地名に係りがあるようだ。

改めて「諸橋(もろはし)」をみると、「諸橋(モロハシ)」の地名は全国に一ヶ所しかない。能登半島、七尾湾の北側に位置する石川県鳳至(ふげし)郡穴水(あなみず)町に、昭和三〇年三月一〇日編入の「諸橋村」である。

諸文書によると、「諸橋」の地名の由来につい

ては、「諸恥(モロハシ)」説、「二橋(モロハシ)」説等があるが、定説は「諸橋川河口左岸の諸橋稻荷社背後の縁山(えんやま)先端上の三基の諸橋(前波)古墳(六世紀中葉から七世紀初頭の首長墓)から海岸の龍燈崎まで「モロ」(古代地名でモロは朝鮮語のモリ(杜)の転化で神を祭る神域や古墳の石室の意とも)から崎の先端「ハシ」までから生じた「モロハシ」としている。

「モロ」が神の依代としての「杜」に由来することに異論はないが「ハシ」については？

漢字「ハシ」を列挙すると「端」はじめ(端緒)、はじ(辺端)。「橋」橋架。「階」きぎはし。「梯」はし(梯子)。「箸」(鬻)食と口の間(ハシ)を渡す意、或は食物などを挟むからの意か。「箸」(鬻)。「間」ハシからハジの間。「柱」らは助詞。

また「ハシ」に係りがある言語としては「崖」(ハケ)谷田の縁の丘の端、「稻架」(ハサ)稻かけ、挟む意、「挟間」(ハザマ)峡谷、「鋏」(ハサミ)挟むの名詞化、「舡」(ハシケ)端舟の意、「始・初」(ハジメ)始めるの名詞化、「走る」(ハシル)はじまるの語頭音、「筈」(ハズ)弓の両端、弓筈(ゆはず)・矢の端の矢筈(やはす)などがあるようだ。

「ハシ」の中で日本人の生活に密着しているのは、「箸」アイヌ語は。パスイである。箸食文化は

米飯を主食とする日本、中国、台湾、朝鮮半島、ベトナムなど東アジアであるが、その中で日本人は箸だけで食事をするという独自の日本型箸食文化をつくりあげた。

箸文化の源流は中国の殷(前一六〇〇〜前一〇二〇年)で、殷墟から儀式用に使われた青銅器の二本箸が発掘されている。

日本では古事記の「箸其の河より流れ下りき。是に須佐之男命(略)女の名は櫛名田比売と謂(まを)すと答言(まを)す。」が初見。「櫛」は「奇」「稻」と箸・「神霊に供食のための礼器としての箸をお供えすると共に願いごとをこめて川の神に供した」ことなどが分る。箸は神聖なものであった。「天の橋立」箸立(生れて百日目の「食い初め・箸ぎめ」など)に片鱗(一端・かたはし)が残っている。

「諸橋」の初見は、承久三年(一二二二)九月六日「能登国公田々数目論」の鳳至郡の「諸橋保」で、次いで『吾妻鏡』建長二年(一二五二)五月廿七日条に、鎌倉幕府執権北条時頼の嫡男時宗出産に際し、祈祷の賞として北条氏から鶴岡八幡宮若宮別当隆弁に「諸橋保」が与えられた旨記されている。初見から諸端(モロハシ)、諸間(モロハシ)でなく「諸橋」であった。

ところで、沖縄と日本本土は民族構成要素の言語・生活文化・信仰・人種など根元は全く同一であるが、言語についてみると今から一五〇〇年前頃、首里方言と京都方言は分離したという。大和朝廷成立の前後である。

『日本人の魂の原郷沖縄久高島』の大祭、「イザイホー」に「七ツ橋渡り」という儀式がある。「あの世とこの世が接する場所として七ツ橋、と称する生木で作った梯子のような形の橋が地表に置く形で架けられている」とのこと。祭祀は四日続くが、三日目の「朱つけとスジつけ」儀式が終わった喜びを神歌(テイル)と円舞で表現するが、その神歌のなかに「イテイテイバシラ(五ツ橋)ナナティバシラ(七ツ橋)」の歌詞があり「五ツ、七ツ橋」の「橋」は「バシラ」と歌われている。本土方言「柱」(ハシラ)の「ラ」は助辞、または接尾語として「神や貴人などを敬って数える時にいう語」である。首里方言に残る「橋||柱(はしら)」の使い方で古人は古墳の地名を「諸橋」とつけたのではないであろうか。

十月の講演要旨 漆原直子

このたび、初めて発表させて頂きます。

お題は『飲酒の歴史と飲酒の今日の問題』です。
 『酒は百薬の長』であるとともに、『されど万病の元』でもあります。私は『酒』に詳しいわけではなくありませんが、人類が最も古くから摂取してきたであろう薬物としてのアルコールが、人間の歴史に及ぼしてきた影響と、それが今日もなお引き起こしている影響についてお話しします。

現代における問題は、「アルコール依存症」という『病氣』の他、アルコール関連問題として社会問題化しています。酒が『百薬の長』であり続けるために、私達はどうすればよいかを考えるきっかけになればと思います。

(2013, 9, 29)

幹事からのお知らせ

1、下山田さんが史遊会事務局を退任されました。長い間お世話になり、ありがとうございます。

当面、後の事務は、庶務〓平山、会計〓村上、「史遊会通信」編集〓新井顧問という体制で

運営致します。各位のご協力を宜しくお願い申し上げます。

2、例会開催場所を変更します。

二十六年一月から、日比谷公園野外音楽堂隣の「千代田区立日比谷図書文化館」(地図参照)四階のセミナールームで行います。十、十一月は従来どおりですからお間違いないようお願いいたします。

3、十一月例会は、諭吉が海舟を非難した「瘦せ我慢の説」をテーマに討論します。諭吉役、海舟役を十月例会時に決めますので、自薦、他薦奮ってお願いします。

新会場の交通アクセス

東京メトロ 丸の内線・日比谷線・千代田線「霞ヶ関駅」C3 (※C4出口工事中)・B2出口より徒歩約五分

都営地下鉄 三田線「内幸町駅」A7出口より徒歩約三分

東京メトロ 千代田線・日比谷線「日比谷駅」A14出口より徒歩約七分

JR 新橋駅 日比谷口より 徒歩約十分

